２０世紀の建築家、ル・コルビュジエのパリを歩く～時代の変遷と形態の変化～」

矢野　沙織

今回、グループの研究旅行でこのテーマにしたきっかけは、ル・コルビュジエの文献である『URVANISME（都市計画）』を現在ゼミで扱っているためであった。文献だけで理解できる範囲は限られており、より理解を深め、研究をより有意義にするには、現地に赴き、直接目にすることが一番であると考えたからである。研究旅行の内容に入る前に、少しル・コルビュジエと彼の作品について述べておきたい。

ル・コルビュジエ（本名シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ）は、２０世紀を代表する建築家である。彼は膨大な数の作品を遺しており、パリなどにも多く存在している。中でも初期のサヴォワ邸と後期のロンシャン教会堂は、「世紀の名作」とも呼ばれる作品である。この二つは、ともに彼の作品を代表する「世紀の名作」と呼ばれながらも、まったく違う傾向の作品である。初期のサヴォワ邸（１９３１）が、鋭い輪郭が際立つ「軽やかな直方体」であるのに対して、後期のロンシャン教会堂（１９５５）は、なんとも形容しがたい姿ではあるが、底知れない魅力を放っている。

今回の研究旅行において、「パリを中心としたル・コルビュジエの数作品を訪れ、実際に目にし、肌で感じながら研究を深めること」が目的であった。実際に目にした体験を踏まえながら、年代順に彼の作品をいくつか例に挙げ、その変化の様子を見ていきたい。

今回訪れた建築物を年代順に挙げると、次のようである。

・オザンファンのアトリエ（１９２４）
・ラ・ロッシュ・ジャンヌレ邸（１９２３－１９２５）
・テルニジアン邸（１９２３－１９２７）
・クック邸（１９２６－１９２８）
・サヴォワ邸（１９２８－１９３１）
・スイス学生会館（１９３０－１９３３）
・ナンジェセール・エ・コリ通りのアパート（１９３１－１９３４）
・ロンシャン教会堂（１９５０－１９５５）
・ブラジル学生会館（１９５７－１９５９）

オザンファンのアトリエは角地に立地する建物で、外観のみの見学となっている。これは従来の重苦しい街角を「透明な箱」で置き換えた、１９２０年代のホワイトキュービックスである。パリ、ルイユ通り沿いの角地に建つ、スタジオ、ギャラリー、住居の用途を

もつこの建物は、アメデ・オザンファンによって依頼されたものである。オザンファンのアトリエは、装飾を排除し、純粋形態を追求しようとする２人の活動のなかで、建築という分野において展開した例として、きわめて初期のものである。この建物もその革新性ゆえに雨漏りなどの問題が発生し、現在ではそれを改善するために、重要な形態的特徴であった工場のようなノコギリ型のトップライトを取り払ってしまっている。

次に、今回の研究旅行では工事中のため見学できなかったラ・ロッシュ・ジャンヌレ邸である。これは彼の最初の名作であり、晩年には、この住宅が自分にとって重要だったことを回想している。初めての大規模な「白い箱型」の実現で、施主のラ・ロッシュ氏に「好きなように」やらせてもらえたおかげで、それまでのさまざまな新しい試みが勢揃いした、重要な作品である。そのさまざまな新しい試みとは、水平連続窓や、「透明な立体」という効果の強調、空中に浮く壁、一階を吹き放したピロティや、緩やかなカーブを描いた曲面壁などである。これまではきわめて直線的であったいくつかの作品の中において、この作品は壁面全体が大きくカーブし、外観における造形的特徴となっている。また、このピロティは実現した初めての例である。

テルニジアン邸は、コルビュジエが「魂の喜び」と表現した、鋭角な三角形の敷地に建つ住宅である。これは彼の初期の作品群のなかでも、スタンダードとなっていくホワイトキュービックス的な造形群とは一線を画し、三角形と四角形の幾何学形態を等価に扱いながら対比させた特殊解であるといえるだろう。道沿いに歩いて行くと、一見長方形型の白い建築物であるのだが、角地を正面に見たときの建物の表情になんとも言えない感動を覚えた。コルビュジエがこの鋭角の三角形の敷地を見たときに「魂の喜び」と表現したのが、よく分かる気がした。

このテルニジアン邸の近くに建っているのが、コルビュジエ自身が「真のキュービックハウス」と名付けた住宅、クック邸である。この作品は、両側を隣家に挟まれた隙間に、正面の壁だけを見せて建つ。平面・立面とも、ほぼ２５フィートで正方形にまとめられている。ル・コルビュジエの提唱する近代建築５原則（①ピロティ②屋上庭園③自由な平面構成④水平連続窓⑤自由な立面）を用いながら思いのままにデザインされ、そのコンセプトは、都市に住む単位家族用小住宅のプロトタイプを目指すものであった。「５原則」と、その実現というべき建築美の世界を、道路側の側面に集約して見せている。クック邸は、テルニジアン邸から歩いて行って左手に位置している。

作品の前には木が植えてあり、塀で囲まれているために見えにくくなってはいるが、彼の５原則の集約された建築物を感じ取ることができた。

クック邸の次は、彼の「世紀の名作」と呼ばれる作品、サヴォワ邸である。これは１９２８年から約２年の歳月をかけて設計され、１９３１年に一応の完成を迎えたが、その革新性、先進性と、施工技術とのギャップなどの理由により、雨漏りや暖房の不備などが報告されており、竣工後も幾度かの修正が加えられた。コルビュジエの提唱した近代建築の５原則が、最も純粋な形で表現され、初期「白の時代（ピュリズム作品）」の到達点といわれる。サヴォワ邸は、建築を幾何学に近づける試みの集大成である。空中にあるので、単純な直方体の輪郭が下から見上げることで確認できる。細い柱の上に載っているから、「幾何学的な完結」が強調される。ピロティが開放的で、背後まで容易に見通すことができる。背後から見ても、横から見ても、空中の箱という効果が明瞭である。さらに、すべての側面で同じように、端から端までの水平連続窓が開いている。サヴォワ邸の住宅としての意義は、「空中で完結する幾何学立体の中で暮らす」という、斬新な生活像を過激に示している点にある。このようにサヴォワ邸は、幾何学的建築の「極」なのである。緑の木々をかき分けて奥に進んでいくと、緑の大地に白い直方体が、青い空に浮かんでいる。天気のいい日は特に、その対比が映えるだろう。開放的なピロティに屋上庭園、端から端に続く水平連続窓に、軽やかで幾何学的な印象を受ける。内部の至るところも幾何学的に設計されているが、表情豊かで味わい深い作品である。

スイス学生会館は、サヴォワ邸完成の翌年の１９３３年に竣工した。コルビュジエは、それまで追い続けてきた純粋ピュリズム建築に一つの区切りをつけ、新たな表現を模索していくことになる。その表現の変化は、「サヴォワ邸の屋上の自立したフリーフォームな壁」や「門屋の基段における自然石の乱積み」、またその発展形としての「スイス学生会館のファサードの反り返り湾曲した壁」や、「共用部の荒々しい乱石積みの表現」から見ることができる。この会館のグランドフロアープランを見ると、ピロティ部分の直線的部分と、共用部の壁の曲線がま

ったく等価に一つの図面のなかに同居していることが分かる。ここまで堂々とした曲線の導入は、これまでのコルビュジエの作品のなかでも初めてである。また、ピロティの柱の形状は犬の骨を変形させたものであり、このことは自然のモチーフをそのまま建築造形のなかに取り込んだ最初の例であるといえる。最初に目にする、正面の反り返り湾曲した壁が、今までの白い直方体のコルビュジエの作品と違う印象を与える。今までの白い壁に代わって、灰色の石を積み上げたような壁からは、それまでの軽やかな印象とは反対に重量感のある印象を持たせている。

コルビュジエが１９３４年以来、晩年まで最愛の妻とともに住んでいたのが、ナンジェセール・エ・コリ通りのアパートである。これも、それまでのピュリズム的表現から新たな建築の進むべき道に向けて進み始めた時期の作品である。アトリエの壁の荒々しい石の乱積み、ボールトの天井はスイス学生会館と同線上の表現ととらえることができる。プリミティブ（原始的）な表現である。また、彼の典型的デザイン傾向とは食い違う鉄とガラスブロックの外観は、それぞれ窓のサイズ、バルコニーの手すりを、対面する通りの高さに順応させている。この作品もクック邸と同じように、両隣を別のアパートで挟まれているのだが、「白い箱型」の延長であるかのような「ガラス張りの箱型」が、進化の過程のル・コルビュジエを表しているかのように感じられる。

そして、コルビュジエのもうひとつの「世紀の名作」と呼ばれるロンシャン教会堂である。これはスイスの国境に程近い、アルザス地方のロンシャン村の小高い丘の上に建つ、ある意味において「近代建築史におけるパルテノン神殿」ととらえることのできる白い教会である。この教会は、ル・コルビュジエの多くの作品のなかでも最も印象的で、見るものに何かを訴えかける力を持っている作品であるだろう。外観は形容のしがたいものではあるが、サヴォワ邸同様、大地の緑と空の青に、教会の白い壁が対比して映え、見るものすべてに感動を与えるものである。濃厚な内部空間では、色とりどりの光の乱舞が美しい、神秘的なものとなっている。

最後に、今回訪れた作品の中で最も新しい、彼のパリにおける４０年近い活動のなかで最後の作品である、ブラジル学生会館についてである。この建築は、ル・コルビュジエのはじめての摩天楼といえるものであり、また日除けのためのルーバー、いわゆるブリーズ・ソレイユを取り入れた最初の作品である。この建築物も重量感のある壁に覆われており、とても力強い印象を受ける。色とりどりの彩色が目に楽しいものである。

このように、コルビュジエの作品は時代の変遷とともに形態が変化しており、その変化の過程によって、彼は「世紀の名作」とも呼ばれる作品を生み出せたのである。その名作を生み出せたのには、敷地の条件などいろいろな幸運が重なったからこそということもあるのだが、それも含め、彼によってしか生み出せない作品だったのだと思われる。

最後になりましたが、このような素晴らしい研究旅行に行く機会を与えてくださった諸先生方、関係者の方々、本当にありがとうございました。

（計４２６４文字）